李本抄

下

去来抄 下

修行教

去来曰蕉門に千変万化一時変化乃句とのみ思ひ是を二ツに付て変化も元を一なり不易我志ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ変化風新なれども不易ハ古ゝ宜しく後ゝ叶ふ今なれば千歳不易といふ流行ハ一時くゝの変化してきたれの風を今日宜ゝ数今日好風も翌日ハ陳腐なるゆゑ一時流行とそこれ

魯町曰俳諧乃基とそいふへき去来曰詞はいやしくして吟詠
するもの品あり歌をもつて一なり其中に和あるをいひ
もつて一なり其ふくをわろしとす俗ハ俳諧連歌ハかくの
ごとくなりとれの一くつをもつて詩中に歌中に旋頭混本歌
亦混をもいふるをするとて詩中に歌中に旋頭混本歌
亦知れぬ事をいひ全く俳諧に迷ひて俳諧連歌
といふるを忘れたり俳諧ともて文を書ハ俳諧文なり
故をよまた俳諧歌なり身を行ひて俳諧の人なり唯ひたすら
見を高くして言をやめり人を遠ふをもとめるの心あるをいひ
ちくしてまいとう苦しかくのごとき器量自慢あるいとふん

連歌の名目をかくすをいふん狡猾とかつとも乱夢となりとも
一家乃風をうしなふ事なかれ

魯町曰不易の句ハ俳諧乃神
ていはく一の拙教奇なる句なり一時乃物教奇なる故ハ
古今に叶ひたるとへと

月毛柄をさしこめたる紅園哉　宗盛

うぐいすとなく花のよし　貞室

秋の風伊勢の墓示すこそ　芭蕉

是等の類ハ魯町曰月を園ハ人をうるも拙作なるすや

去来曰賦比興ハ俳諧のうちにかまくらの吟詠の自然なり凡

殆あ〜風を形容する事なり〜拙教者とハ
いひがたし
曽町曰流行の句ハいりて玄来曰海りの句きたのたは一つの
拙教者ありてたやすく形容衣裝器物者にいるまて時と
乃ちやまあるのことし〜たとへて
むすやすは夏はこしきの暑さうな
此神久〜しく流りす
あれハ松まてこそ〜へまき物書　松下
海光肥る世光渡るも夜ふかなも　常矩
或ハ句をもあるひハ旅書の詞つひ人を謡の詞とりもち成

拙教者ありてたやすく一時屏形容衣裝器物者にいるまて時と
人なり〜曽町曰むすやすは夏にこしきといふを孫あるまや
玄来曰孫を旅の一事なりて拙教者ありてたやすく成迄ハ
孫とはいひあり
曽町曰不易流行其元一なりとそいひ玄来曰世事雜〜
〜有情人体またとへていて不易を無為の附流行を
坐卧行住屈伸伏仰乃形用〜〜〜〜〜一時〜くの
変風を之を姿ハ時に替るとい〜とも世為もの有為ものを
用〜人也曽町曰風を変るはさ人あり〜〜いた
玄来曰本を為〜て末を変る時を或ハ変風を変風

俳諧をこるれ或を離れ打まといへとも侍らるし

曽町曰碁より出るを出さるを云いうに玄来曰碁を去る

すしてハ解しるかゝむ先あゝいに知れる物一ツ

をあけて物ゝ物ゝりすたゝへて先師の風といへとも

貞固ゝ松々門ゝ女ともきほひ

流あり蓮乃葵ゝ去ほゝく雨をいきしゝゝ　素堂

らゝを詩ゝ語ゝ又文字の教合さるゝも

散花ゝたゝらゝめしゝゝれの春　幽山

ゝ句を謎なり俳諧歌ゝ謎の神もゝ事ゝや色ゝゝ

俳諧歌体よりハいてゝて素しゝゝ

曽町曰先師も碁よりおさ曽風体ゝや玄来曰奥州行脚乃

おハゝあゝも世ゝ御のゝたちに云しゝ行脚の

らちにも　あるむさんやる甲の不ゝきりく須とゝ句あり

後ゝあなゝ二字を捨らゝ是のゝにあゝ異体乃句

ゝもゝゝき接ゝも多ゝ此年のゝゝめて不易流行の

教を説給へゝ曽町曰不易流行の事を言続ゝや先師乃

発明ゝや玄来曰不易流行ハ事ゝ渡る迹ゝ礼ゝゝ

ゝんの先達を伐いふ人なし　長頭丸ゝ来ゝを込る一神

久しく流りし　角樽や傾けのゝふ丑のゝ

ゝゝ水あけて咲せよ天龍寺とゝつるまてに吟しゝゝり

世人をいふ所のさき物とおもふ所のあたらしき風を
変することを是として宗因師一度きこえりてよりこのかた
彼の新風を天下に流行し侍るといふまでに此教なし
是よりしておよそ都鄙の宗匠達古風を用ゐ一旦流行
を起せりといへども又新風をもちくものゝ物として時々変ず
るなることを志して先師あらためて誹諧の本体を見つけ不易
の句をたてまた風を時々変ある事を志す流行の句
変ある事をわかち教ゆる然りといへども先師常に曰宗因なく
んば我々誹諧今に貞徳の涎をねぶるべし宗因は此道
中興開山なりといへり

丈艸曰不易の句も當時の体を好みて作る故是も又流行の
句といふべき也

去来曰蕉門に不易流行の説あり或ハ各自の一句々の上を
云説あり是も流行の句といふべし然とも不易流行の
教といふはこのいはれ本体一時々の変風との事也

去来曰俳諧を修行せんと思はむよりは時代々の風
宗匠々の体を能く考へ知り尽すべし是我が志す時の新古
おのれ々々の分ある物なり

去来曰俳諧の修行者ハおのれの好める風の先達の句を
一すぢに尊み学びて一句々に不審をおこし難をば撰ふ

毒のうたを解するなる句あるいはいとあるべき故あるんをとるべ
或ハ功者に尋問むべし　我ら流儀ハ上業にまさるひ
人ハ句も用ハ多くハ始より一句くゝ成とるなるは
他を吟味のうちあり自分かさるまてを終あ功成るる
をもとに先師曰今ハ俳諧を日ハあるべきを席に
のうんてハ氣樣をいふ吐毒　公頭の義なるべし
支考曰むかしハ諧を如来禅のとく今ハをいふハ
祖師禅乃ことく捺著すれを即轉す
去来曰先師を門人ハ教ハあまたとて極ハ示
ハあるハ句毎にさハ念を入ハ句まあるハ句は

まよく俳意たるうに他へしとも元句ハ一句口ハ
十七字ハ一字もかろそに毒のうに俳諧まさを
うに和歌乃一体なり句ハ句ハ句ハ他へしとも
をを他ハハ氣性を口質よりてなりあしくハ
筆を迷ふいとすなり同門の中ハ迷をとる人多し
先師曰発句ハ所ハすくといひて毒を上品とす
洒堂曰先師曰発句を沙ハとく句二ハ三ハとあつて
他ハ多ハあるに成ハの人ハ毒あるとあるを
先師曰農句ハ句をとり合を作を出るを句也まをとく
云合ハ成上手とひあしくを下手といふなり

許六曰發句ハ取合て仕立する時を句多く出来る者なり
初學ハ句案ニ功者を取ふ事一切者ニ及ては取合不取合の
論ハ無之

許六曰發句ハ題の曲輪を能出て仕立ル事のみにて
なるべき也自然曲輪乃中ニ入て天然ニ成事希也
去来曰発句ハ曲物の図面なり能ハ能ハ即興感偶
すると雖も多くハ図あり然とも常に案ずるに図を多く
多くハ古人の糟粕なり千里ニかけ出て吟ずる時ハ句
新鮮なる事一筆類なり初学の志思ふべ
き也功を積ム及ては又内外の論なし能ハ能ハ能ハ能

句毎曲輪の図なり予此事を示ス時ハ電ニ徳利さけて無之
ハ云成徳利さけて無之ハ月に皆さのやきを
利ハ云ハ徳利ハ皆ハ駒迄と云事也
去来曰他門ハ蕉門と共一筆ニ遠ひあり と見ル
蕉門ハ景情ともに高く有ハ吟ハ他流ハ心中ニ巧ハ図
と見えたり

元日ハ室ハ出舟小 鴨川や二度の鉦ハ新一つ
禁裏ハ蓮来なり 湯ハ出舟ハ新
ひとり川ハかき車ハ皆是 細工せり新なり
去来曰蕉門の發句ハ一字不通乃田夫十歳以下の小児も時ハ

ようてよく句あり却白化門の功者といへる人を芭蕉翁の
化流をくみ流乃切者あるべきを俳諧はよき句をもつて
しと思へるべし

去来曰俳諧を新意を尊みすといへども拙なき情を遠ざけ
いふべきはあれども若事柔弱にしていふべき品ありたるべし
感時花濺涙惜別鳥驚心或を桜花ちるべんなんあるべしと
ふるさとの人の来てもとなくにといへるたぐひなり感時惜別
大文人の見るべき是也一首乃眼也

去来曰俳諧は火をも水かいひなすべき清捕かい一筋の迷ひて
雪乃降る白き汗をかきたるいふ

人あり夫を火を水とはいひなすべしとの心なるべし
はるべき故なり雪の白き汗をかく中に一句成能ひびきを
はべるべし嘆くべき事なり一句成能ひびきを
たぐひいひ事也の影也

去来曰句案ハ二ツあり趣向より入ること又詞道具より入ること
なり初乃裏より入る人を発句也趣向より入る人を
遅吟寡句也さればと案ずるべき論る時を趣向より
入ることとす詞乃道より入ること和歌者流を嘆
と見えたり俳諧をあるべきにはべ
去来曰蕉門ハ同巣同竈とこそ事あり是を芭吟の清歌

み入て他を取句也たとへて竿うちくて物をつるるとらふ
句をかの鍋う陸をかさいる或ハ杖うみしくて地をとらぬ
とかしゆる也同竈乃句ハ多かるしさ杖と見よりり
生ものしたたんハ又を柄なり
去来曰句に句勢とり事あり文工文勢語ゑ語勢あるの
としたたんとふとく小藤雪ふるとと云句を先師曰
事あるとゑとかゆゆる陸るとと他を句勢ありとなり
去来曰句に姿とと云も杖ありたとつと
妻よよ雑る杖身をかとすば　去来
初ち竹句つきよよ雑るのとろとと他とりとを

先師曰去来汝いまく句杖姿をもとすや同事も杖いつて
姿ありとて事ハ杖るなり支考ハ風姿といるもとと
去来曰句に語路とのふも杖あり句としつの事也語路を
盤上を玉のはるるのとく滞なをとすと又まを柳の風に
乱るるとく優をれるるも杖もしろたん溝川ふ去沢の
なの陸ものあるりくなるとをたるハいろしとを蓮中
一句二句ハ曲をるせるもあるとしまとも詩歌の滞なを
ち嫌ふ也
先師曰幾句ハ昔より杖く聲を他を雅句ハ三変にと
ち杖をむうしハ附物を先ととすと公附をとすす

人うを移す筆示係位をんを隋るをよりて
杜年曰いるる筆白ひの移すといつるや
去来曰支考多あまを書出せり是をみとりくること
るをいるるいお先師の評をあけてさらちん化いわ
るをいるるいは

赤人乃名をつるかるかるる歌　史邦

多もさいるる合点あるるいは　去来

先師曰つりといひ白ひとひ寒ハ去年中三十棒張
るけらはるる去るいなりと拍ひ拍ひの交るわりつて
白ひとるも移るるも白ひ名句化ひあやけてのるを

歌ぬるの境るはて冷暖身知乃時ありてハ惜しい
むる事あるる帝此白ひ赤人のるもおるるやと行ハ
るも嘲るるいなりけるるを化るるを名きるる
るるるいるるり合点なるるいるはおるつるりとる
味乃ひるるは趣いる筆いるてハひるくるるるたるる

るる深み浪るるるるけを折るる
月かるる化太刀のるるるる我乃よ

先師此句を引て数るるて右のるるて土筆を折つる
花於手ゐて太刀るるるるる表紙をして語るる紙る
一句るに趣のかるるるるなるて言語み為るるる紙るる

看破せらるべし

杜年曰句の位とはいかなる事ぞや去来曰余句位を知る附る事なりたとへよき句ありとも位為せざれば先師の意の句をあげていく

上京新千葉きくさむもうえめさる
馬ずおぬ自は四てうひも歌

前句き人の妻ゆもあるべし武家町人の下女ゆもあるべし宿屋

同屋新下女なりと見て位を定めるべき也

細き月に花見る人の頬かな
ゆるゆる色ゆる新袖ぬ梅ちる

前句古代乃人のありさま歌なり

白粉をぬりもてゆもゆ地くろい歌
袖ぬ月ゆ新袖の たき ゆ新

前句の句ゆ面ゆ女と見ゆ

尼ゆるゆる雪乃きぬ〻
月新ゆ環ゆ月ゆすん乃すゆ

前句いかにもて能ゆ面の妻と見ゆ

ふすま面つんて洗ゆ
鳥ゆゆ意新ゆ乃ゆ成 持せゆ

前句町家のうゆゆるゆ見ゆて他ゆ知ゆ

[illegible]

杜牛曰面新まて隋[illegible]云ハいふ吉来曰[illegible]紀自[illegible]
隋後の[illegible]蕊也おもふけき隋世[illegible]事也むし[illegible]ハおほく
さ事[illegible]を隋[illegible]面新まて隋るとふを

草莨に志ほ[illegible]ふ[illegible]ていはやより
いのちふ[illegible]ふ撰集乃ほ[illegible]

初き和哥の奥儀き志[illegible]隋[illegible]
先師曰翁を西り能因ゑの境界とんふ[illegible]
[illegible]に西りと隋んを[illegible]む[illegible]面新まて
隋[illegible]ぬいふ面西り能因の面新

[illegible]なり又人を言て[illegible]
発ん[illegible]めに[illegible]すふ山
西行の隋ふを[illegible]人き隋て
先師曰いふ面隋そふおもけ[illegible]ん[illegible]面新の[illegible]
支考も書[illegible]ふ[illegible]ん合[illegible]
支考曰隋句ハ一句也前句隋[illegible]
一一連謝ふいふて[illegible]場き人其時節[illegible]前後の
[illegible]合ありて一句に多ハおき物也
云来曰隋句ハ一句ゑ千万也故ゑ謝諧変化極[illegible]
支考ふ一句ゑ一句といふる[illegible]隋る場の事なる[illegible]隋る場き

多くなる拙也句を一場の風流まいくれも有一
先師曰氣色をいうをとりてもすし天象地歌人事
草木魚虫鳥獸のおを一新を取容みなく多くなる也
支考曰附句ハ附る物なり今ハ離離をつくるをよしとす
先師の句一句もつくるハなし
去来曰附句ハ附さ様を附句ハ附るハ病なり
今ハ他者附る事を初んの業のおほえてつけく
附さる句多し一人も又少なきと人乃いうむ事を能
附さる句を咎めた却るよく附る句を笑ふやうく多し
ふつゝきとは合なる事も多し

去来曰附物をつけ又ハ附るを主附るを第一
附物ハ付をれ情をひらく附んをは前句ハ付を自ら
なしてハいつまゝ虚をてこの附んハ作者なる事也
去来曰蕉門の附句ハ前句の情を引来るを端ふ前句ハ
見いるを場いるハ人を其事を信をよく見定る前句
をつきとるして附一
先師曰附物をく附る事當時好たとへても附物をて附
るるむをさ川をりを附物をて付るるむハ又多物なる一
宇鹿曰先師十七の附るを路通に伝授し給ふを来日
幸境の門人の所ゐ信を附方を書出し給ふをしを後く

とも成り附方は是まかりとる人の迷ひあんとする成
拾ひ風を半おし詩の分十七ヶ条とやん学えり是を
伝受とたまふるを志しる大津みてのすとやむなく仏
路通も甚反古紙拾ひとりて人を教るや許六曰はすを
祈るるは千那法師なり
去来曰附句は行事なくさらくとやるをとすとす巻を
ふむに思業工夫しを附句を学むを苦しる事也
去来曰風は千変万化をいふも句体新く清く軽く
慌なる正く厚く閑なる和なる剛なる解るなるうしこ
速なる如此はうし純く濁れる弱く重く薄く寂なく
渋る雅く騒しく言まかくのとなは悪し但し嘆きを純なる
句なを吾悪あるべし
支考曰附句は句ゐ新言なし附る場を新言あり
去来曰古風の句を用るにも場ありてよりさ純を言風の
ふるはいふ古体なるをとやん今やを首し
先師曰一巻表より名称を一称なんは人なるるうるし
去来曰一巻面を学事を他るし初折の裏よりおこり
表まをる物数寄も曲もるし半より名称の裏ようけ
てはさしくと貴新ぬやみ他るし未を至ては互に
退屈いてきしくなる物也移ふる句あんとすれば却句を

まてをあぬ物なりさ仕ると未くまと吟席いさみあり事
好き句出来んと毛理ま止るまあす好句を思ふ事こと
とい事こ

其角曰一巻ま多句九百十句有ども一二句好句あるハ結ん
結句をせんと行ものこと仕ると不出来なるまなりいま
好句多うむこちハ随分好句を思ふ事

去来曰附物ま て附ま事 尚時嫌ひ侍ると ちあるりと又合
一巻ま一句二句あるハ人ハ多風流なるこ

浪化曰今ハ雑諧物語多を用ゆる事いと去来曰同しくハ
一巻ま一二句あるまを し猥義の中ま侍人いりし小法門の

縫も門ちの翁なり此集撰む時拾ふり示の句をくちし とく
粽詰ふの句を化して入給つる

去来曰凡吟ある時を風あり風を必変す是身拙のすこ
先師毛詩よく見知ま一風に ちくとちまるまの ちま事を
示し給つるたちひ先師の風なりとも一風にをつんて変化
をあるさ多を却る先師ハ ちろに たちこを

杜年曰発句ハ苦思いうに去来曰叢句ハ人のまりとも
感ちるうよ しさもあるこ しと云ハ毛須也さまあこ なやと
いふを又毛須こさまあ しこ しとふを下也

杜年曰叢句と附句の境ハ ちろに去来曰七情万景 ちろに

面るをゝ發句あり隋句ハ常なりたとへハ蛍の柳まと廻り
そゝけとらふを發句ふるゝ蛍の身を逆まとらふを
發句也杜年曰公ゝ面るを家ハ皆発句なるつゝ去来曰ひとち
發句ゝなるゝと成ゝぬとありたとへて

つき出しやや樋の流れのひきゝ屋　好春

此句を先師の古池の蛙と同しやうにおもふるゝ事
ゝ〳〵しく笑ふ歟なりさそんもとゝまり興もあゝむ
さしゝと發句ゝなるゝ物なり去来曰さひい句の発也
野明曰句ゝさひきいゝる物なり去来曰さひい句の発也
閑寂なる句をゝふるゝたとへハ老人の甲冑を帯し
戦場ゝ働き錦繡をかさり市妻ゝ清りても老の姿をゝ
隠ゝる句にも静なる句ゝも動なりたとへて

花ちやや白きかゝらをつきあてゝ

先師曰さひ色よゝくあゝ枯ゝり
野明曰句の位ときいゝる新古来曰こゝ也又一句をあく
和の花ハたゝ見ゝ入る園の門
先師曰句の位景ゝ有ゝ作ゝ古来曰早竟句位を
格のゝまゝにあり句中ゝ理屈をとひ或ハ物をたゝ〳〵或ハ
あゝ合ゝる発句ハ位ゝ有ゝまゝ也
野明曰句ゝ志ゝり細ゝとハいゝるゝまゝ也古来曰志ゝり

八哀なる句あり細に八たりを記句あり作者の
句数多あり細に句数を見も證句をあげて
いとく

十数るも小粒なるかりぬ秋乃風

先師曰此句志をりあり

そこともを森入てわるる余吾の海

先師曰此句細にありと評し給ひしと也

去来曰想ひてさひ作細に志をりの事い汲心傳心なる
唯先師の評なあけて数て他者打て明也

先師近化乃年深川を出給ふと紀野坡問曰ていはく

やとり今のとく作し作し世わ先師曰志をしく今の風
なる人ーーあ七年もるを者ハ又一変わむとなり刑
今年素堂子洛の人を伴へ曰蕉翁の遺風天下に
満て衆く変す不時いかに吾子ろをさを問う
して我と吟舎して一の影風を奥りせんとなり去来答云
先生の言かるけなく悦ひ作る予も兼こ此思ひ記るも
あるる幸ま先生をーーろたてて二三の影風を起さい
おそくハ一度天下の人をたろうせん志れとも世波
老の波日こうちかるり今も風雅を遊ふ夢紀いとまも
なくとく唯作多わもひ作るおくとを中素堂をを

先師の古友なる博覧賢士の人なり名は世小傳名
[illegible] 近来[illegible]すること[illegible]
吐出[illegible]

於暮雨巷　嘘居士一音書

大尾

太來抄跋

嵒岡之璞非人採之則誰知璞之爲玉乎一日　先生年二三子游焉得諸幽蘭之下琢而磨之皓〻乎世所謂玉鏡也使對之盾心在塵埃之外則去末之功至是可謂粲輝千歳矣吾徒愉快其在於斯

井士朗

安永四年乙未三月

皇都書林

井筒屋庄兵衛

橘屋治兵衛